

明治座の所感を虚子君に問われて

夏目漱石

青空文庫

○虚子に誘われて珍らしく明治座を見に行つた。芝居というものには全く無知無識であるから、どんな印象を受けるか自分にもまるで分らなかつた。虚子もそこが聞きたいので、わざわざ誘つたのである。もつとも幼少の頃は沢村田之助とかとつしやう訥升とかいう名をしばしば耳にした事を覚えている。それからさるわかちやう猿若町に芝居小屋がたくさんあつたかのように、何となく夢ながら承知している。しかも、あとから聞くと訥升がひいき鼻唄だつたという話であるから驚ろく。それはおおかたうそ嘘だろうと思う。物心がついてからは全く芝居には足を入れなかつた。しかし自分の兄共はそろい揃も揃つて芝居好で、家にいると不断こわいろ仮色などを使っているから、自分

はこの仮色を通して役者を知っていた。それから今日までに団十郎をたった一遍見た事があるばかりである。もつとも新派劇は帰朝後三四遍見たが、けっして好じやない。いつでも虚子に誘われて行くだけで、行ったあとでは大いに辟易へきえきするくらいである。

○それで明治座へ行つて、自分の柵ますへ這入はいつてみると、ただ四方八方ざわざわしているろんな色彩が眼に映る感じが一番強かつた。もつともこれは能とさほど性質において差違はないが、正面の舞台で女の生首を抱いたり箱へ入れたりしているのにその所作しよさには一向同情がない。万事余計な事をしてるように思われる。まるで西洋人が始めて日本の芝居を見たら、こうだろうと想像されるくらい妙な心持であつた。全く魚の陸見物おかけんぶつである。

○それからだんだん慣れて来たら、ようやく役者の主意の存するところもほぼ分つて来たので、幾分か彼我の胸裏きょうりに呼応する或ものを認める事ができたが、いかんせん、彼らのやっている事は、とうてい今日の開明に伴つた筋を演じていないのだからはなはだ気の毒な心持がした。

○その特色を一言で概括したら、どうなるだろうと考えると、——固もとよりいろいろあり、また例のごとく長々と説明したくなるが——極めて低級に属する頭脳をもつた人類で、同時に比較的芸術心に富んだ人類が、同程度の人類の要求に応ずるために作つたものをやつてるからだろうと思う。例を挙げると、いくらもあるが、丸橋忠弥とかいう男が、酒に酔いながら、濠ほりの中へ石を抛なげて、

水の深淺を測るところが、いかにも大事件であるごとく、またいかにも豪えらそうな態度で、またいかにも天下の智者でなくつちや、こんな真似まねはできないぞと云わぬばかりにもつたいぶつてやる。そのもつたいぶるところを見物がわつと喝かつさい采するのである。が、常識から判断すれば誰にでも考えつく事で、誰にでもやれる事で、やつたつてしようのない事である。だからもつたいぶり方はいくら芸術的にうまくできたつて、うまくできればできるほどおかしくするだけである。それを心から感心して見るのは、どうしたつて、本町の生葉屋きぐすりやの御神さんおかみと同程度の頭脳である。こんな謀む反人ほんにんなら幾百人出て来たつて、徳川の天下は今日までつづいてるはずである。松平伊豆守なんてえ男もこれと同程度である。

番傘ばんがさを忠弥に差し懸かけて見たりなんかして、まるで利口ぶった十五六の少年ぐらいな頭脳しかもっていない。だから、これらはまるで野蛮人の芸術である。子供がまま事に天下を取り競くらをしているところを書いた脚本である。世間見ずの坊ちゃんやんの浅薄愚劣なる世界観を、さもさも大人ぶって表白した筋書である。こんなものを演ぜねばならぬ役者はさぞかし迷惑な事だろうと思う。あの芸は、あれより数十倍利用のできる芸である。

○油屋御こんなどもむやみに刀をすり更かえたり、手紙を奪い合ったり、まるで真面目まじめな顔をして、いたずらをして見せると同じである。

○祐天ゆうてんなぞでも、あれだけの思いつきがあれば、もう少しハイカ

ラにできる訳だ。不動の御利益ごりやくが蛮からなんじやない。神が出ても仏が出てもいっこう差さしつかえ支つかないが、たかが如是によぜがもん我聞の一二句で、あれ程の人騒さわがせをやるのみならず、不動様まで騒さわがせるのは、開明の今こんにち日はなほだ穩かならぬ事と思う。あれじゃ不動様が安やすつぽくなるばかりだ。不動をあらたかにしようと思つたら、もう少し深い事情を原因におかなくつちやいけない。その上祐天がちつとも愚鈍ぐどんらしくない。いやに色気いろけがあつて、そうして黄色い声を出す。のみならずむやみに泣ないて愚痴ぐちばかり並べている。あの山を上るところなどは一起一仆いっきいっぶことごとく誇張と虚偽である。鬢かっらの上から水などを何杯浴びたつて、ちつとも同情は起らない。あれを真面目に見ているのは、虚偽の因襲とらに囚とらわれた愚かな見物

である。

○立ち廻りとか、だんまりとか号するものは、前後の筋に関係なき、独立したる体操、もしくは滑稽踊こっけいおどりとして賞翫しょうがんされているらしい。筋の発展もしくは危機切逼せつぱくという点から見たら、いかにも常識を欠いた暢気のんきな行動である。もしくは過長の運動である。その代り単なる体操もしくは踊として見ればなかなか発達したものである。

○御俊伝兵衛は大層面白かった。あれは他ほかのもののように馬鹿気ばかげた点がない。芸術と、人情と、頭脳が、平均を保っている。また渾然融こんぜんゆうこう合ごうしている。幕の開いた時の感じもよかった。幕の閉まる時の人物の位置態度も大変よかった。そうして御俊も伝兵衛

も綺麗きれいであつた。ただ与次郎なるものが少々やりすぎる。今一步うち場に控えればあんな厭味いやみは出ないはずである。

○しまいの踊は綺麗で愉快だつた。見ていて人情も頭脳もいらない。ただ芸術的に眼を喜ばせる単純なものであるから、そこが自分にはすこぶる結構であつた。

○最後に一言するが、自分は午後の一時から、夜の十一時まで明治座の中で暮した。時間から云うと大変なものである。これは日本の芝居が安過ぎるか、または見物が慾張り過ぎる証しょうこ拠である。実を云うと自分はもつと早くすむ方が便利であつた。ただ、まだあるものを途中で出るのもつたないから、消極的に慾張つてしまひまでいたのである。自分と同感の人も大分あるだろうと思

う。しかし見物が積極的に、この長時間に比例するほど慾張るが故、役者もやむをえず働らくとすれば役者はなはだ氣の毒である。同盟してもつと見物賃を上げるが好い。牛肉でも葱ねぎでも外の諸式はもつとぐつと高くなりつつある。

青空文庫情報

底本：「夏目漱石全集10」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年7月26日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～1972（昭和47）年1月にかけて刊行

入力：柴田卓治

校正：大野晋

1999年6月14日公開

2003年11月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

明治座の所感を虚子君に問われて

夏目漱石

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>